三御殿

白毋子

中村俊定文庫
文庫 18
719

三冊子序

当地人乃三冊をもつて和歌より起て名よりをさて
連歌より三冊の狩ひとりもめつらかなる代の尤し
られハ三部ハいつれもさらふしていつれる部乃きこう
ふと家三乃道ハ風人乃きとつかるのあしられハ
此三冊乃も伝賀乃お黄世ら道世地ふ法を
義減後三十年ハいさしら浪半三千年ハ言れ
ぬのつ名のとく後三十年ハ蠢のつ変よわぬ
ちうハ半ふく世出をひらふまハ玉ひとくふのの
とく函底ちこうて道のるよ

珍蔵
横林主蔵

ものがたりしハ今年拝よりもむるまと
ちりし文の中なられハ五車韻瑞乃字国語も
形く新陰の板中小とゝのゝさしハ日と暗の
生う妙りもなし筆をとるにんとをのゝしハ
三伏の暑すれ初秋の涼しき法おりむさ
而已をかく書るものゝるゝ

安永五丙申

宝化房
蘭更

世之事伎芸熟者。樹黨逐派。
低勢護短。図誘門下者噫可
歎矣哉。諸歌者添水注病諸。
夫人病熟則譫語。掌壓心而
瞳必覺。或倒溝壑。或没波濤。
恠追鬼捕。諸般苦辛。一為傍人
所嘲。諸芸如浅蓋樹黨護短
者。無未解。覺焉耳。斯書
也。蕉翁之遺言。而土芳係筆

記聞更捽仏二千世為二祖融
氏所集。今茲新剞劂功成焉。
其言叮嚀精清。實一可下彼鳴醒
病二熟大與獻兎者。而能洗諸苦上也矣

享和改元之春

生々庵瑞馬撰書

瀧川文庫

中村俊定之印

しらさうし

俳諧を爲之爲ハ天地開闢の時より有陰神陽神儀駄序
語に天下をてまつめかを喜哉遇可義少女とを形人語り是ハ爲もるるれもん
まをふ詞まもる示ふ爲之故より是を爲れ始と是と神代より
文字定まり是人の世と成て是さのをはるまりて三十一字と爲る
八雲たつ出雲八重垣つまこめよ
やへかきつくる其八重垣を
此爲り定れる始と和歌風ふれハ和哥と云和歌の連
歌俳諧あ是連歌ハ白川の法皇の代ゟ是歌の名有

此号は先ハ徳寿と云千句の数もはてまゝ日本武尊東
夷せんとつの下の吾妻は筑波ゆて
新らつくをこゝて幾夜ねる
と侍るゝ歌は
かなくて夜ハ九夜日ハ十日よ
中央絶し此童の次伝を長連弘の起とゝ云り業平世の
玉かゝの使の時ハ舟京歩めり人のいとたとぬぬ天ゆ一あれ
と云上ハ又逢坂乃関ハ越なんその盗れ四のついまゝのまと
て為れ来玩歩付とゝ侍り
後毛利の流時雨の林法師小林と云連歌の差合ゝ事の為

法式の云俳諧ハ先本式あり聯句法立之是より形式あり
俳諧と云ハ貴門定家卿の云利口之物をなまむきたるゝまゝ
形きものゝ人を有物ゝ知ぬゝ利口しゝ狂
韻学大成ゆ鄭綮詩語多諧俳ゝ戯之諧ハ和也唐ハ
和也て俳諧を俳諧と云又滑稽と云有滑稽管仲
楚人答ゝ本朝ハ一休和尚あゝ是ゆハ人ハ和尚ゝ答乃
年乃上ゆ侍りていゝ為利ゝ古今集ゝ入れ家を俳諧
家と定む是ハ形ゝ人て連歌のたゝこと成世ハ俳諧の
連歌とゝ
夫俳諧とゝ今ゝ代ゝ利口のゝたハれ先逆俗

よ諧を新潟中洲雅彼の橘翁自出とする説く世上に廣
く知られ中分いかめしく詞と説くかゝる記名之ものに
亡師芭蕉翁氏道に出て三十余年俳諧初て実成なり
師の俳諧は名おのゝ名ゆゑにむしろ此俳諧は兆れ諧の俳
諧にさしは俳諧の名をてもあるに誠をあらく代しむるく
拙ノ移るゆいあるや師も氏道に古人なりと云又故人
の翁をそれは求るにやまし今おのふ処の流も氏後行をも
出てをそれ我をたゞ来者を恐ると云く詞有むしろ
侍奇に名ある人あり皆その諧ならむく諧とたるなり我
師は誠なれりのに誠を侍へ永く世の先達と為る俳下

代〳〵久しくを色て氏時俳諧に諧をなるの天正に氏人の後
をなるや師をいかるる人を連俳を連一之句詞を連歌有俳諧
をなるの詞を連俳を流れも詞を連俳別てむしろ法仕
をなるの詞有俳言と云ゆゑ声を云詞都ら俳言と連歌
のなる声のものあれも俳言の方と序風に帳拍子律の
調に例あるの胡蝶形と云れと句連歌のなる鬼女就
虎そのか千句のものく詞俳言と連歌に始く詞の猿木花
桜雲の雪雪雨小夜門出猫人幾女かの詞を言枕ゆを
結巴の列書小みも数多く侍るの結の新ら俳言と
名よめてゝおるるとゝろて女郎花

我等ごときの人のかゝる非

此歌僧正遍昭さりし世の読るの時より見る之俳諧の手本
なり詞もやさしからぬ歌ながら心乃
さればこそ下の句と書る之先師の心ろく聞しへの俳諧す
難解あれさなれとも読めやうに思ひ入べき哉

おりふてふ人の心乃くらさに
立かくれてなるよしもかな
金としてはるの清のちらりと
なら經よりそ花ハ咲くれは

又曰く長安の柳ハ今新連歌之田舎しき為ゟ全く

俳諧之又月雨に鳴の浮草をとれのくとりて句ハ詞を表
ぬなし浮草をとるにゆんと云所俳之又春月や鳴のごとく
双居てと云發句に見れ新しれあきれ新しくより振を心
詞もに俳あしかる句をつけて一首のてく仕立しうるま
俳諧なり詞ゑきんず有其かこの句みれ新作きに有
信所一筋ょをよへうりまて
詩歌連俳ハされ風雅之上三のもの八飾も所もその飾す
所と俳ハされと云所あし花に鳴鶯も餘に囊さる縁
の先とまて正月もおしきとの比をえとめ又水に住む蛙を
古池にとびこむ水の音といひかけして草にあれたる中より

雅のことゝ書に俳諧を雅なるにきはまるを俗名歌
とゝ云ハ俳諧の誠こ俳諧の式のゆハ連歌式
より習て先達の法をもとゝ連歌の形式を追加りに
二條良基撰改作之今案ハ一条禄園の作この三ツを一紙と
したるハ宵抑乃作とこ連ゝと数ある抑ハ四とゝ七句去
りのハゝ句とゝ万俳諧ゆれハゆをやをくゆ法ゝとゝ
今案の追加ゝ漢和の法きをを大抵俳諧の法とひうゝを
立ゝこ真法の先合の書そのおそのを世にゆゝそのゆ
をゝこハ師信用ゝ立ゝこと云りその中に俳を言とゝ才
大抵よゝとゝ云ゝ先合のゝゆもおくてハ調ゝ

師の門ゝとゝの一ゝ法門ゝとゝハ甚ゝ公不ゝ法を垂と
ゝゆハ重紀西ゝされゝも老れゝとゝいそゝ名あれて
ゝ法ゝそゝゝてハゝゝ名の詮ゝ代ゝ法まゝゝ法れと
人用ひゝれハ伝ゝゝ為ゝゝ法を出して私ゝ先を守れとハ
酌ゝきゝ不ゝ先合のゆハ明空みもゝゝ先ハ大ゝゝに
して宜ゝこたゝこゝ法さゝあるゝ不ハ亜ゝ侯して位用
て学ゝ為ゝりの密ゝ門の法ゝも形さハゝ
為のゝを先師云ゝひうゝゝを二句法れハ寅ゝ
句ハ恋の詞を為ゝ集メ恋その詞をつゝを句とゝて人の
恋れ後をゝハゝるゝいまゝゝ恋ハ恋別ゝ大切のゆゝ形ゝゝ

[illegible]そのかゝ宗祖の宗祇の句を一句まて止の例を挙るも
[illegible]此後所〻門人も読て一句ホても変〻さるもの[illegible]
[illegible]又ある時云〻お句点ともに点句付かゝれ句
[illegible]必点の句を付てお句ともに点にたゝ[illegible]とゝ点をハ此
句ばかりてつゝく点をも及[illegible]彰式ハ点法あるゝ
[illegible]も点の[illegible]ハ分て[illegible]座の宗匠に任せ[illegible]とゝ旅の[illegible]
ある俳云る師の句連歌に旅の句三句てさ三句ハ[illegible]
多くゆゑ[illegible]ハ神祇又恋雑の句旅ハてさ[illegible]
今旅点雑ホ[illegible]て又一句[illegible]此所ハ[illegible]旅雑の句ハ[illegible]
会ハて[illegible]ともを[illegible]ハ[illegible]

邪の仮形る[illegible]と[illegible]とハ連の旅[illegible]とあり又旅
[illegible]の一部も[illegible]人[illegible]
[illegible]旅を[illegible]彰式[illegible]云彰古今已来の作者を[illegible]
八代集ハ古今後撰拾遺後拾遺金葉詞花千載彰古今[illegible]
[illegible]後土御門依勅新勅撰続後撰二代を加へて十代集[illegible]
[illegible]彰式[illegible]又堀川[illegible]の作者[illegible]の八十代の外の集[illegible]
[illegible]とも[illegible]集[illegible]ぬ[illegible]とも他[illegible]珍味[illegible]
又彰式[illegible]人のあ[illegible]くさ[illegible]を八付合[illegible]を
[illegible]ハ仁用[illegible]
[illegible]奇[illegible]ハ古今の詞を[illegible]

合一作るをつゆ陸会と八所遠を或ハ一句余情又名所後
会うる趣を付るをつゆく陸ハ八〇里の集まてもてあつまる
輪廻のくらゐ新式ハ美とつゆ句にかゝるとかゝと付てまゝ紅葉を付へか
らに而まて見へ〇まゝとつゆ字かゝる所之爰とつゆ句に西鶴
付て身花を分る半西鶴りのゝとをてを代ふ付ゝ文云を理ゆん
ふ蛙を又たゝくハ蛙とつゆ句に風ゝも霞ゝも付て又ふて付ゝ
数句を重ゝるとつゆふゝも一座まて強之化性之又作ゝ云句に世
と付て又汁出る時夜の字ふ付之めゝの扶を掃迎ゝおしと
云ゝ山と付次ゝ富士ゆと付ハ扶那て打越〇ゆるゝ之式
頓他准之一巻の内似ゝる句頓之なゝ是を掃迎ゝ小扶の

六

ゝ句ゝそゝに出へゝ作ゝ作の小ゝく代の句ゝゝ先ゝ句ゝ
句小ゝ影ゝゝゝを出ゝぬりのゝゝく思ひ別て味へ〇ゝゝ句に
陸ゝ他の句ある時ゝ必ゝゝ句を川句一新句ゝ表ゝ裏のゝ
ゝゝ句小もゝゝ〇ゝとハ云ゝゝ大扶のゝて小扶ゝ扶ゝ
へ〇ゝゝ紅連ゝ扶ゝ小ハ方にゝ〇ゝを云ゝ句て山風
や扶ゝき花を送ゝんとゝこの句山風の扶ゝき花を送ゝ
て全ゝ〇ゝ扶ゝ句同ゝの連ゝ紅ゝ作〇ゝ
ゝを又いゝく

新ゝハ霞ゝゝ月に年一かゝ
秋風ゝ吹く白河の関

七

都ゆかしさ言葉尽しても
なほ白川の関
武家の支配のいとくいあり（ゆゑ色をかへたる俳諧
まことに不易のうるはしさ云ふべし今師の心
所後のこと外月比旅を出て十月ゆ及ひ白川を過り記
のちを尋ねて前の俳諧法師れいをとひ出し所
その家の所を感涙ちるとぞ云ふ詠る所あるべし
出て不易ならんと云ふ切字の中師のいとくむしとも
用ひ来る文字も用ひ連俳の出る要くあるゆへ切字なく
てハ句ハ成ぬ切字を加へ句ハ辨へ切字を加へ句ハ

姿ある句ハ切字ハ切る句にあらず又切字なくても切
句有を分別切字の用ハ其その位ハ自然と出るなれハ出
ることゝ程ハ侍あ至師考ゆるを大切ふ示されし
あとゝそのゝちもゝ梅の花と云句をして切字を入るゆ
を楽しらんし侍ゆ切ハ句ハ切字なくて切ることに侍
ると云ハ切ることなしとも切字ハ初心の
人乃道のまことゝ思ひ侍てすゝつねゆ侍しむへきて
ハ切ることゆもなき句を句とゝ思ひやむしも考えたしなも
へし中示されしゝ
文章のゆ師れいとく無名と文章ゝ序ゝ西序

序内序とゝ之体あり由ハ新るゝ〳〵と考ハ先
のゝを序内ハその古の内れるゝを古之体とひとしく
て序一ゝも考ゝ之跋古ゝ序あゝ跋あゝ序
も跋もその古而〳〵跋ハ序を発表〳〵云る物之ゆゑ
とゝりて表〳〵せるれ之序跋ゝ序号自を云又字
七字云ハ考ゝ字の格之七又之形ゝ地の詞孔子云あるひゝ
対あゝ対ゝ必対を並くゝ古ゝを並対ハ古ゝ孔対野山水
色生死ハ古のゝ対同黄之詞古ゝの古格和ゝあゝひゝし
漢ハ古ゝ跋もあゝゝ之紀ハ生物を紀ゝの之格ハ序
跋ゝ同〳〵ゝの遠のゝ格ゝ古ゝ同〳〵ゝ孔遠のゝ賛ハかゝる

のゝ之即山吹ゝ句を古ゝる対ハ山吹をゝ色て賛之山吹ゝ
褒義の義理之越る又ゝ古対四字ゝ古大ゝの格之
句合制のゝ序義あゝと云ゝ連中の打毒詮俊批判ゝ
を之蛙合ハ序義判の格之故ゝ判者も志と形〳〵ゝ
とゝふ対ゝ者奥ゝ跋ハても又序あてゝ考ゝ句引
まてゝ付ゝ之ゝに合ゝ序の対義ゝ孔刺もあゝ
序の制ハ古ゝゝ又壹を立ゝ判ゝ方ゝの雅陳あゝ
判者色を考ゝハを加ゝ〳〵判を考之巻沢ゝ多く
ゝ持のゝの之
懐紙のゝハ百韻ゝ式之五十韻ゝ仙ゝ孔異ゝ之連歌

の古式ハ表十句各篇の裏六句目七句去花裏表ニ一巻
究表の内名所必一ヶ所今も清水連歌会ハ始めしとなり
師のいとく古法表十句の例をもて八句ハ後二句ニ付て
表ニ始ふるの新連歌に今にせを倣ふハくるしかるべし連
歌に就虎鬼女さし出る新表の内猶他諸ハ鬼女ハ
形のごとし就虎ハ人ごとかるべかの人を数を切るべ
なとれれハ用捨ありて百韻一巻ニ通ずと師の云こ
又歌の詞述懐の新祝言に云る句ハ表の内いく付んん
とたつる時師のいとく句にとる〳〵又字ハくるしかるべ
祝言ハいひ出ることも人のうへに云ちいよく述懐之花のさび

しの新ちくるしかるべ家ニ強ふるる多良ちとく金乃貴
家を称ち句ハ用捨ありて〳〵他人の句ハとうむて〳〵之又述
懐ちを外嫌ふ古ゆ年祝を下句ニして表ニ付ちくるべ
又他句のごとく用ひる形と句の新いく付んと云ハ師乃
いとく大形ハ表ニ嫌ふ〳〵すにもよるべきすくるいつれと
てもくるべ詞ハ出ざるしてくの下に嫌ふゆを持るハ
他者清かるべくきる形〳〵一向ようちゆてそるる発る
〳〵ハ表の群ニあるべきれハ考ニくるしかるべうもせ
ミるあハあるべと云至又古今の人の名表ニもを用ひ付る
人とうゆ〳〵に師の云今代人乃名をつしむ〳〵古人

の名ハおよつてくるしかるほしさにもなるしく慈
と云て懐紙に歌を書くていとしのむしよりあるこのほし
書なくて歌ハさるゆゑなりいかんハいてあと云ハさるゆゑハ知て
大切のゆゑ懐紙に歌を用るゆゑ神代よりはなし
まるの例と歌なくてハ詮なきゆゑつゝしむべしを
師のいとくたとへハ仙ハ三十六歌三十歌もあとに残る心
なし行よりもうしろの改ハたゞ先人行人なれハ人数なし
ゆゑハ一座者の詠られハ初心の者を主とし一ハ雲の物ハ
主ハ法を白紙もるくゝ位よりし知を主とし一とむるを
云ふる先師も懐紙のかゝ白かるこをなれし時代もるこを

ゆゑや作人又古来より新宅の舎に燒るを慎なと少其者
追悼よりて紀乃迷ふ罷とゞ紀中に残る志つゝ浪風かゝ
歌いむべきに歌とゝゆゑ莊ふ具の唱一座よ美舎の名ハめて
主へしかの白のこにふ沼主くゝ紀ある〳〵紀を亭主のゆゑ
事むしよりゝ云志られもそ屋ふもよるべし客かの白
とてむしハ必宮よりゝ挨拶井一にかの白を紀を紀も答る
こくにうけて挨拶を付作るこ師のいとく紀亭主此白城
云る示ゆ挨拶之雪月花のゆゑ此云る白少てもあい
志のかゝとゆ教こかの白に二月三後る京和出る時ハ紀
主て菊季を定むべしを連歌のゆゑ俗ゆるこくゝ

と師のいふくの句に祇園人義を分一事なる附ハ意して
紙上にたとへ詞をもさしたるものあハ仕ハ祝ふもの
季一変りにして云句々紙面無あ〻てもなるべしたる句
み依一一對付遠付うら添ハ當の紙ひしより云意不
師云分一ら句をうまてつりあひ半ばうら添て付る
より一句中に低をぬ気ぬ事あるべし當りハ文字なきハ至
宜上にから留メ自然よあるべ口決あり并一意対合体
のんとあり〻一一低去らるべきハ先ら句もるとよく半
去発させるもの又ハ低去より念意をあらハるやうう
挨拶してよく半ばて紙上にとかさるハ多かるして

去下為るもの又たとへハ連歌のから句ハ聯句ハ唱句と掘を對と
此格をいて文字留と詩聯句に習て韵とふと并二ハ師の口
大付あてを特して考るべき上にとなり或去ハ當りの
るもの一ハ法なる一宗祇より此格式と用る通りも
疑の切字れら句乃内を并二とも孫字にとめるとも古来云り
うるひの句二句去留と読ハうるひのら字なり句中ニ
押一字あるやかいつ伝ふらの紙之又句よりて押字なく
てとまるあり一字とまるとをうんちうんの紙之ハ當り於句
の并二ハて留メせんとも一ら云り是法室の伝なる世
と之花のちうハ身ハ光ハの紙之盛りあてひうりあて

といふかようふこ先師のいとくみてになるか留メてしかれ
ども留ハ始ふへしとらり又字留を示蒙留自然よりの
古法は作者多之一説古書こあるハ振の台韵字留り也へ
悔年小文字留りなるバさるまに留之為掘を示蒙まて
留メは分之文字留小て留るとも之をかくせすを進人之
ゑ考の留をよしとを見はのるく分之ハ精をる成者
とをしとも掘の句によるへし遠付れ和し付ホの句ハ時
を分之ゑて特をるにおよハさるなるか句悪非祇
ホのものゑて掘を に疑をる時分之にをり必を特し
とをれをとをへし師の説之四句めハをしをり四句めをる

と云て中をくかるきをようこれ師のをくを主をハ四句月
の体をいかしに掘をひとしに句中に仏をせれをこをを説
和と始ふをを之要秋の季つきに句月をて花月の句をを
留必あるをこの師説せを句めを七句めれを三てを説を
古説ある主七句めも同しをれを之分之の後一帙上の句を賞を
中留も月の産ハ名ある而之老分に留へし月字を表を始ふ
も懐紙をたしに和を而之て留をを字留ハ句ハ一体表道
具をを裏を然て四要八本と連孔を古説あり四句め要を
せれ八句めを言を人知せれ花をつを句を主を之俗語を
をれを他の句を返をにをふ及要出ハ花を付へしをを

おしみ花と称する花の多句ハ秋の字用ひ難し然れ
花をひつゝきわさと連歌ハ秋ハ句よりてしむと
之他之多句ハ一身の定座とかれる事ハ師のふるく
より内ハあるべくうれ無ハ少の無事も成るりの多り
宗仙ハ心ゝかる句一器の物句之身の左右ハ字有時も共
今る時を実名ハて書くゝ実名の仕ると人ゝの化をハあるく
しと師の詞之又師のふるく身ハ上句勝たるゝ一流身を
身の句てしゝ句ゝ時ハよるゝ法ハあゝれと之星月夜
ハ秋ハて実の身ハあれを心句に出る時ハ十月ハ
他季ハて有時ハ書ると身といふ字に句師と教式

又師の白表ハ月二ッ稀ハ有此時ハ身数八ッ之名の表ハ
まれも身形しと之花のもハ花ハ本の内下ハ句ハ一句ハ
定座まれまもれ形しと之賞花の句多句への付句
又その一句のふう実ハ梅菊牡丹形と下ハにして仕立花
多ふしる句その本まに書ふ事を持ふ花ゝ書ふ或ハ
四月ハ花を見るまゝ九月に花咲ると云句いゝと云ハ師の白
九月ハ花咲なといふ句ハ非云之形きるべたとく名本成
偽して花と外云ふも四花之花ふふハ樹のもるゝ形
表花をいふ色ハを四花ハせしてハ花の句多く出る賞
雅しと宗祇の時代を百韵花之本之両一ッ之宗也の時

よいてう白ひの花一六一兩一の勅許を蒙り文台美圓せり
是て花四本兩二ツあり結る連歌の式と師の詞と
裏一ツのみも初のあくとかろくとある〳〵句なきを退ぶ
うも及ばゝ揚句八付さるよし〳〵と古説を今一句まで乗ず
一座無覚るなくまゝ是て乗〳〵ゝ云ゝか句を美
事之の事る所よあれ神の一ツは執筆ハ句形ハ揚句成
筆ゝ事〳〵か句ある文字をつゝしむとゝ四ほひの花て
事事不句に成るゝも揚句に事をとゝ形〳〵ゝ成たゝ事
六句に及ても事〳〵しゝとゝいつまゝの事無ても揚句ばかり
ちう句ばかりなれある〳〵